



## 年間第 10 主日 (マルコ 3:20-35)

より大きな器に身を置いて神の望みを知る

一連の大きな祭日が終わって、年間の主日に移りました。今週年間第 10 主日に選ばれた福音朗読箇所、「これはイエスが語るような言葉だろうか」と思わせる箇所があります。私たちの器が小さくて、イエスの言葉を理解できない場合は、私たちの思い込みをあっさりとして捨て、もっと大きな器を神に願い求める必要があります。

枢機卿様となられる大阪の前田万葉大司教様に、二人の補佐司教様が与えられることとなりました。酒井俊広被選司教様と、アベイヤ被選司教様です。私は酒井被選司教様とは十年来の付き合いがあります。新司祭のころから、当時聖堂学園の先生だった酒井神父様と、毎週のようにテニスをしていました。雨が降っても室内のテニスコートを探すくらいにテニス仲間でした。

また、私が太田尾教会の主任司祭となってからは、わざわざおいでくださって、ボートでの釣りに出かけたりもしていました。海の魚はお客様さんには親切なのか、私よりも酒井神父様がよく釣っていたような記憶があります。

このたび司教に叙階されるということで、お祝いのメールを送りましたら、叙階式においでくださいとのお誘いを受けました。日程が調整すれば、喜んで見届けに行きたいと思います。またご本人から、黙想会の説教師を探すのに苦労しているなら、どうぞ私をお使いくださいと言っていたいただきました。黙想会の謝礼をどうするかという問題がありますが、考えてもいいなあと思っています。

司教に選ばれる方々は、東京におられる教皇大使から、「あなたは補佐司教に司教に選ばれました」と伝達されるわけですが、どうやら酒井被選司教様にとっても全く予想だにできなかったことのようにです。多くの方に挨拶として発送した手紙を読むと、司教職にふさわしくないことは誰よりも自分自身がよく知っている。けれどもこの小さな自分を使って神は大きなわざを示されるのだろう。そう思って引き受けたというように書かれていました。

酒井被選司教様にとっても、神の計画を知るために、自分は器ではないと思っても、神の望みが自分の思いを越えているときは、あっさりとして自分の器を捨て、もっと大きな器を神に願い求める必要があったのでしょう。神さまが与えてくださるより大きな器に植え替えられて、より大きな仕事ができることを願っていますし、できれば叙階式を見届けて、被選司教様のために祈ってあげたいなと思いました。

福音朗読に戻りましょう。初めに私が「これはイエスが語るような言葉だろうか」と思ったのは次の箇所です。「また、まず強い人を縛り上げなければ、だれも、その人の家に押し入って、家財道具を奪い取ることはできない。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。」(3・27)

これは強盗のすることであって、イエスはまるで強盗の仕方を手ほ

どきしているかのように聞こえます。何回もこの朗読個所に当たったでしょうに、今の今まで疑問にも思いませんでした。皆さんもこの個所をミサの中で、自分で聖書を読む中で聞いたり目にしたりしたことでしょう。疑問に思わなかったのでしょうか。

そこで、私たちの思い込みという器をいったん捨てて、より大きな器でものを考えるようにしましょう。「強い人を縛り上げて、家財道具を奪い取る」と言うのですが、このたとえを面と向かって話しているのは「彼は汚れた霊に取りつかれている」と言っている人たちに対してです。

もし「強い人」が、「律法学者」のことだとしたらどうでしょう。イエスの眼に彼らは群衆を知識で抑圧している人々に見えていたかもしれません。すると、「家財道具」とは抑圧されている群衆のことで、律法学者を縛り上げなければ、取り戻すことができなかったのではないのでしょうか。

おそらくイエスは律法学者に、「あなたたちの私への非難は全く当てはまらない。あなたたちが家財道具と思っている群衆を、私はあなたたちから取り上げる」と、警告を発していたのでしょうか。イエスのたとえの中に、強い警告が込められていると考えれば、イエスがあのようなたとえをなされたことも理解できるのではないのでしょうか。

朗読の後半についても、「イエスの母、兄弟」とは誰か、より大きな器に身を置いて考えさせようとしている、そう考えると理解できます。決して、家族を軽んじても構わないと言っているのではありません。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」(3・34-35) 神の御心を行う人は、人に対して果たすべき務めを決して見誤ることがないのです。

冒頭、酒井被選司教様と私の交友に触れましたが、酒井被選司教様は所属しているオプス・デイというグループの中でも中心的なメンバーでした。所属しているグループは家族のようなものです。しかし、さらに大きな器に身を置いて働くことを教皇様に願われて、決断をしたのです。オプス・デイというグループの中で没頭して働こうとしていた神父様に、イエスは「周りに座っている人々を見回してごらん。『ここにあなたの母、あなたの兄弟がいるよ』」と言われたのだと思います。

誰にとっても、自分の見ているものが正しく見えるものです。しかし神は、時としてより大きな器に私たちを移し替えて、違った見方を示し、ご自分に従うように招くのだと思います。私たちはその際、執拗に自分の見方にしがみつくべきではないのです。時にはあっさり自分今いる器を捨て、より大きな器を受け入れる必要があります。こうして神の国は広がっていくのです。

神は私たちの日常の関わりを変えてでも、より大きなものの見方を身につけさせ、宣教の担い手とすることがあります。神の招きに大きく心を開き、新しい景色の中で、神の使いやすい手足となっていきましょう。そのための恵みを、このミサの中で願うことにしましょう。